

特集 認知症、これからの診断、治療——新たな抗アルツハイマー病薬の出現をへて——

認知症、これからの診断、治療——新たな抗アルツハイマー病薬の出現をへて——

前田 潔

本シンポジウムは老年精神医学会、認知症学会、神経精神医学会が合同で、認知症の診断・治療についてシンポジウムを企画するものである。

老年精神医学会と認知症学会はともに認知症を対象とする我が国を代表する学会組織である。

神経精神医学会は器質性精神疾患を対象とする学会である。会員は重複することが多く、共通の対象として認知症がある。

さて今年、認知症、とくにアルツハイマー病に対する、新たな治療薬が発売され、この領域に新たな展開が予測される。そこで本シンポジウムでは認知症の診断・治療・地域連携・病態研究に関して改めて整理することが必要であると考えシンポジウムを企画したものである。

老年精神医学会からは島根大学神経精神科の堀口淳先生に「認知症の症候学的診断」という題で、認知症の診断および経過におけるマネジメントについて話をいただいた。男性認知症患者への対応は介護関連施設では大きな問題であるとの指摘があった。同じく老年精神医学会から香川大学中村祐先生には「新たなアルツハイマー型認知症治療薬と今後への展開と問題点」というテーマで、今年、わが国において新規に発売された3剤を含め、抗認知症薬の使い分けについてお話しいただいた。中村先生は新規発売の3剤のうち、2剤の治験に中心となられた方である。認知症学会から国立長寿医療センター・認知症先進医療開発センターの柳澤勝彦先生に「アルツハイマー病の治

療：現状と展望」と題して、アルツハイマー病の根本治療薬の開発、アミロイド仮説の再検証といった内容のご講演をいただいた。柳澤先生はこの領域の我が国の第一人者で、難しい内容を臨床家にもわかりやすくお話しいただいた。ついで神経精神医学会から私が「認知症医療・介護の地域連携——アンケート調査より——」というタイトルで、兵庫県の2か所の認知症疾患医療センターで行ったかかりつけ医の意識調査の結果を発表した。大都市圏のかかりつけ医は認知症への関心も高く、認知症に積極的にかかわる姿勢が見られたが、過疎地のかかりつけ医は認知症にそれほど興味はなく、かかわりの意識が低かった。過疎地では高齢化率も高く、割合として認知症患者は多いと考えられるが、専門医も少なく、認知症医療は進んでいないと発表した。最後に韓国 Sungkyunkwan 大の Oh 先生に「The Clinical Use of Cognitive Enhancers in the Treatment of Dementia in Korea」のタイトルで、韓国での抗認知症薬使用の実態を報告していただいた。それによると韓国ではドネペジル41.5%、ドネペジルのジェネリックが16.5%、ガランタミン14.2%、リバスチグミン12.9%、メマンチンはジェネリックを含め11.7%であるという。

会員の新しい抗認知症薬に対する関心は高く、会場は立ち見がでる盛況であった。各発表内容は各演者の報告を見ていただきたい。

第107回日本精神神経学会学術総会=会期：2011年10月26~27日、会場：ホテルグランパシフィック LE DAIBA、ホテル日航東京

総会基本テーマ：山の向こうに山有り、山また山 精神科における一層の専門性の追求

シンポジウム：認知症、これからの診断、治療——新たな抗アルツハイマー病薬の出現をへて—— 座長：森 啓（大阪市立大学大学院医学研究科脳神経科学）、新井 平伊（順天堂大学医学部精神医学教室） コーディネーター：前田 潔（神戸学院大学総合リハビリテーション学部）